

さわやかに たからかに とこしえに

秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校 校長室だより第9号
2021年3月18日(木)発行 文責 信田 正之

アイデンティティと寛容

私が小学3年生のころ、ある目標が学級に掲げられました。「標準語を話そう」。今の人なら滑稽に思うでしょうが、私たちはそれを大真面目に受け止めました。なにせ、当時の田舎には純粋な標準語を話す人など誰もいませんでしたから。先生でさえ「訛りのひどい標準語」か「丁寧な秋田弁」という有様です。唯一、標準語を聞くことができる場はテレビで、白黒画面に映る「花の都東京」に誰もがあこがれを抱きました。一方で、自分の暮らす田舎が無性に貧乏くさく思え、いつしか標準語は「いい言葉」、方言は「悪い言葉」と言うようになっていたのです。目標の根底には、「標準語も話せない田舎者は恥ずかしい」という思いがあったのだと思います。

さて、言うのとやるとでは大違い。想像してみてください。普段使い慣れた「んだ」という方言が、ある日を境に「そうです」となるわけです。当然、会話は弾まない。しかも、誤って方言を使おうものなら壁に貼られた表に容赦なく×印が書き込まれるため、教室にはいつも気まずい空気が漂っていました。結局、このことで学級の和が乱れ、目標は立ち消えになったのですが、私の心には「そもそも方言は悪い言葉なのか？」という疑問がずっと残ったままでした。

それから小中高と秋田で育った私は、大学進学のため生まれて初めて県外に出ました。異郷の地で何より不安だったのは、やはり言葉の問題です。秋田弁丸出しでは話が通じないし、何より田舎者と思われるのが嫌でした。ですから、最初のうちはできるだけ人との会話を避けていたように記憶しています。しかしある時、私の不安は取り越し苦労であることに気づきました。実は、多くの学生たちが生まれ故郷の方言を気兼ねなく使っており、私の秋田訛りを暖かく迎え入れてくれたのです。大学で知り合った学生たちは、今でもよき友人として年賀状のやり取りをしています。今思えば、彼らに共通していたのは、生まれ故郷の言語や文化を愛す心と、他者を受け入れる広い心を併せもっていたことだと改めて気づかされました。

今の世は、多様な文化や価値観が未だかつてない規模で交流するグローバルな時代です。そのような時代に求められる心とは何でしょう。私は「アイデンティティ」と「寛容」だと考えています。アイデンティティとは、直訳すると「自己同一性」、つまり「自分が自分であることの意識」ですが、個性や郷土愛、帰属意識などの意味も含まれます。一方の寛容は、「広い心で他者を受け入れる」という意味です。これらは相反するものではなく、むしろ共存すべきであり、一方に偏ると争いが起こります。小学生時代に私が体験した出来事は、郷土愛というアイデンティティの欠如が原因であり、逆にアイデンティティばかりが膨らんで寛容が失われれば戦争が起こることは、多くの歴史が証明しています。最近でも、学校におけるいじめやコロナ関連の誹謗中傷、日韓関係の悪化など、例をあげればきりがありません。もちろん、大学時代の友人たちが両者を兼ね備えていたことは言うまでもないでしょう。

アイデンティティと寛容。私は清陵生の皆さんに、この2つの心を大切に育ててほしいと思います。社会のグローバル化が進めば、人の考えや価値観はますます多様化していきます。しかし、この2つの心があれば、皆さんの周りには自然に仲間が集まってくるでしょう。そして、そのような人間こそが、本校が目標に掲げている「21世紀を主体的に生き抜く人材」と言えるのではないのでしょうか。